

国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品のイメージ

—共通意味空間におけるイメージ分析—

頭川 昭子・松浦 義行・若松 美黄

The images of dance works won in international creative dance contests

—Image analysis in common semantic space—

Akiko ZUKAWA, Yoshiyuki MATSUURA and Miki WAKAMATSU

The purpose of this study was to clarify the images of dance works won in international creative dance contests. The problems were solved through analyzing the images of the dance works in common semantic space based on different factor solutions. Ten prized dance works in the two contests ; "The Fourth Saitama International Creative Dance Contest" held on January 30th, 1988 and "The Fourth National Cultural Festival Saitama 89 • Saitama International Creative Dance Festival 89" on November 4th, 1989 were selected for this study. The dance works performed in less than 12 minutes each were filmed on 8mm video tape.

In order to measure the images of the works, the 46 semantic scales which were originally developed by authors were utilized. The raw data were obtained from two sessions of experiments. One hundred twenty five college students participated in the first sessions, 116 in the second, and all of them were asked to respond to 5 different dance works as stimuli with 46 semantic scales. Common semantic space was constructed based on two different factor solutions induced from the different experiments. As the results, the following inferences were derived ;

1. Multiple factor solutions in two different experiments produced 9 factors in Experiment 1, and 10 factors in Experiment 2. Those factors were already found in past studied of authors.
2. Dimensions in common semantic space were composed of 6 factor axes with opposite two directions ; 1) lucidity : lively-lonely, 2) beauty : beautiful-ugly, 3) energy : activity-passive, 4) flexibility : stiff-flexible, 5) harmoniousness : harmonious-inharmonious, 6) distance : close-far.
3. The significant differences in each dimension were found in more than 60 percent of total number of paired dance works. Significant differences in the images between the works were found in the most differences in "flexibility", while the less differences in "harmoniousness".
4. All dance works were imaged to more beautiful in beauty dimension and to more harmonious in harmoniousness dimension. Moreover, the most differences in the images of the dance works on each dimension were found between the works of different countries. This may suggest that the images of dance reflect the cultural difference on which the dance works were created.
5. The images of the 10 dance works in 6 semantic dimensions were entirely different. It suggested that each dance works had each unique characteristics.

Key words Dance works, Images, Semantic differential method, Factor analysis, Common dimensions

緒 言

舞踊作品には様々なレベルや特徴がみられる。作品の構成時間については即興的な作品から、長い時間をかけて練られたものまであり、演技では多くの人々に気軽に踊れるものから、高度な表現技術を必要とするものまである。また作品の発表場面は、学校の中で友達同士で鑑賞し合う体育館の中や、照明装置のついた舞台上演される作品まで様々ある。本研究で問題にされるのは、国際創作舞踊コンクールにおいて、作者によって意図的に時間をかけて創作され、高度な技術を持つ演者によって舞台上で発表され、舞踊作品に眼識のある審査員によって評価された作品である。高度なレベルの芸術作品のイメージの分析は、作者の意図がどのように観客にイメージされ、伝達されるかを知ることにつながり、作品の創作や指導に貢献できると考えられる。

本研究に関連して、頭川、松浦ら(1980~1990)は1980年に46個の対比的な意味を持つ形容詞対で構成された尺度を客観的な手法で抽出し、舞踊運動表現や作品としての刺激に大学生の情意的イメージを測定する尺度に反応した結果を資料として、意味空間における舞踊のイメージを分析してきた。しかし舞踊運動表現や作品の分析における資料は、同じ被験者の同じ刺激に反応した結果に限定され、また重相関係数を用いて選出された共通の尺度を用いて異なる被験者の共通の刺激に対する反応値(1988)に限定された。本研究では異なる刺激に異なる被験者の反応した結果が資料とされ、因子解の類似度から求められた共通次元をもとにして、異なる実験における作品のイメージの特徴と傾向が分析され、推察された。この方法は、多くの実験における刺激の分析を共通次元で解釈でき、舞踊作品や運動表現などのイメージの特徴を探究できる方法であり、今後の研究に貢献できるものであると考えられる。

1. 問題の設定

本研究は、異なる2回の国際創作舞踊コンクールにおいて審査された入賞作品のイメージの特徴と傾向を、多変量統計解析の手法を用いて抽出された共通の意味空間で分析され、推察されるために行なわれた。

1) 入賞作品の作品間のイメージの差異は、共通の意味次元とその構成尺度を用いて明確にされ

る。

2) 入賞作品のイメージの特徴は、共通の意味次元とその構成尺度を用いて明確にされる。

2. 仮 説

1) 作品間のイメージには、共通の特徴と、差異が見られる。

2) 各作品のイメージの特徴には、独自性が見られる。

3) 国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品の傾向が見られる。

3. 研究の限界

1) 研究対象とされたコンクールは、「第4回埼玉国際創作舞踊コンクール」と「第4回国民文化祭さいたま89・埼玉国際舞踊祭89」の決選大会である。

2) 研究対象とされた入賞作品は、各12分以内の10作品であり、ビデオテープに収録されたものである。

3) 問題の解決のために、意味差別方(SD法: semantic differential method)、多変量統計解析の手法が用いられ、意味空間において作品のイメージが分析された。

4. 研究の立場

選択された舞踊作品の芸術的価値そのものが検討されるものでなく、作品の情緒的意味を持つイメージの分析を通して、入賞作品の傾向が検討された。

5. 研究の独自性

国際的に高い水準で創造性が競われる舞踊コンクールが選択され、共通の意味空間で異なる実験の作品のイメージの特徴と傾向が分析され、推察された点に独自性がある。

研究方法

1. 刺激材料

「第4回国際創作舞踊コンクール」の決選大会は1988年1月30日、「第4回国民文化祭さいたま89・埼玉国際舞踊祭89」の決選大会は1989年11月4日に埼玉会館大ホールにおいて行なわれ、VTRに収録された。各々入賞した5作品の合計10作品が選択され、各々作品の上演順にダビングされ、

刺激材料とされた(Table 1 参照)。

2. 資料

舞踊のイメージの測定のために抽出された、46個の両極性を持つ形容詞対に5段階の副詞で評定される意味尺度(1980)が用いられた。意味差判別の調査法で1988年8月～9月にかけて、125名の大学生、1989年12月～1990年1月にかけて116名の大学生が舞踊作品としての各5刺激の合計10刺激に反応した結果が資料とされた。

3. 資料の処理

1) 得られた資料をもとに、各々46尺度相互間の相関係数をピアソンの方法で求め、Z変換を経て平均相関行列を出し、これに主因子解法を適用し、固有値1.0以上の因子を取り上げ、Normal varmax基準による直交回転を行ない、実験毎に多因子解が抽出された。

2) この結果から因子解の類似度を検討するために、タッカーの因子的一致係数式が用いられ、0.500以上の類似度を持つ、同類の命名因子が抽出された。

3) 共通の因子とその構成尺度は、各因子毎に出現率100パーセントで0.400以上の因子負荷量を持つ尺度が抽出された。

4) 各意味次元毎の各刺激の意味差判定値が算出され、平均値からの差異で作品のイメージの方向が確認され、作品間のイメージの差異と、作品のイメージの特徴が分析され、考察された。

結果とその考察

1. 各実験における意味空間

1) 実験1

最終回転数25回転、最終ヴェリマックス基準932.452の結果、全分散に対する累積貢献量52.76パーセントで、9因子が抽出された。より高い貢献量を持つ尺度から、各因子を解釈すると次のようになる。

第1因子は「にぎやか—さびしい」、「明るい—暗い」、「うれしい—悲しい」、「楽しい—苦しい」、「愉快な—不快な」などの構成尺度の意味から「明快性因子」と命名された。

第2因子は「清らかな—不潔な」、「美しい—みにくい」、「上品な—下品な」、「自然な—不自然な」などの構成尺度から「審美性因子」と命名された。

第3因子は「大きい—小さい」、「激しい—静か」、「広い—狭い」、「強い—弱い」などの構成尺度から「力動性因子」と命名された。

第4因子は「かたい—やわらかい」、「はりつめた—ゆるい」、「直線的—曲線的」、「鋭い—鈍い」、「きびしい—やさしい」、「男性的—女性的」などの構成尺度から「弾力性因子」と命名された。

第5因子は「個性的—平凡な」、「新しい—古い」、「良い—悪い」、「すき—きらい」などの構成尺度から「新寄生因子」と命名された。

第6因子は「安定した—不安定な」、「正確な—不正確な」、「まとまった—ばらばらな」、「規則的—不規則的」、「同じ—異なり」などの構成尺度から「調和性因子」と命名された。

第7因子は「複雑な—単純な」、「細かい—粗い」、「むずかしい—たやすい」などの構成尺度から「難

Table 1 Titles, choreographers, and dancers in Experiment 1 and Experiment 2

Works	Title of dance works	Choreographers		Dancers
E1	1 屋根の下	K.F.	日本	3名
	2 悲劇の相貌	R.S.	日本	3名
	3 SENSATIONS・感覚	M.V.H.	フィンランド	5名
	4 北の春	N.K.	日本	7名
	5 EMANCIPATE・解き放つ	S.M.	日本	3名
E2	6 “People Will Say We're in Love” (皆は僕達が愛しあっていると言う)	K.M.	アメリカ	3名
	7 “GODOT” (ゴドー)	V.V.	キューバ	3名
	8 “GUELL” (ギュエル)	B.F.	西ドイツ	3名
	9 レクエム・エテルナム	Y.M.	日本	3名
	10 雪女	E.I.	日本	3名

易性因子」と命名された。

第8因子は「短い—長い」、「近い—遠い」などの構成尺度から「距離性因子」と命名された。

第9因子は「軽い—重い」、「少ない—多い」、「若い—老いた」などの構成尺度から「重量性因子」と命名された (Table 2 参照)。

2) 実験2

最終回転数16回転, 最終ヴェリマックス基準931.570の結果, 全分散に対する累積貢献量57.22パーセントで, 10因子が抽出された。より高い貢献量を持つ尺度から, 各因子を解釈すると次のようになる。

第1因子の「明快性」, 第2因子の「審美性」, 第3因子の「弾力性」, 第6因子の「力動性」, 第7因子の「重量性」, 第8因子の「調和性」, 第10因子の「距離性」の7因子は, 実験1で命名された因子と構成尺度は多少異なるが, 同様の意味内容を持つために, 同名の因子として解釈された。

第4因子は「面白い—つまらない」, 「好き—きらい」, 「良い—悪い」などの興味, 思考, 評価などの感情を表す尺度で構成されたために, 「感情性因子」と命名された。

第5因子は「大きい—小さい」, 「広い—狭い」, 「高い—低い」などの構成尺度から「空間性因子」と命名された。

第9因子は「細かい—粗い」, 「複雑な—単純な」などの構成尺度から「繊細性因子」と命名された (Table 3 参照)。

以上をまとめると, 異なる刺激, 被験者による2実験から, 実験1は9因子, 実験2では10因子が抽出され, いずれも筆者らの過去の研究に見られた因子であると言える。

2. 共通の意味次元とその構成尺度

各々の因子解の類似度は連関式から求められ, 共通尺度が1尺度しかない「重量性因子」を除い

Table 2 Naming of factors, selected scales and meanings of signs for Experiment 1

Factor	Factor named and selected scales
F 1	明快性 (明快感—暗然感) にぎやか—さびしい 明るい—暗い うれしい—悲しい 楽しい—苦しい 愉快な—不快な こっけい—まじめ かわいい—にくい 派手な—地味な 面白い—つまらない 速い—遅い
F 2	審美性 (美的感—醜悪感) 清らかな—不潔な 美しい—みにくい 上品な—下品な 自然—不自然な すき—きらい 細い—太い かわいい—にくい 良い—悪い
F 3	力動性 (活動感—沈静感) 大きい—小さい 激しい—静か 広い—狭い 強い—弱い 派手な—地味な 積極的—消極的
F 4	弾力性 (硬直感—柔軟感) かたい—やわらかい はりつめた—ゆるい 直線的—曲線的 鋭い—鈍い きびしい—やさしい 男性的—女性的 強い—弱い つめたい—あつい
F 5	新奇性 (新鮮感—平凡感) 個性的—平凡な 新しい—古い 良い—悪い すき—きらい
F 6	調和性 (協和感—不協和感) 安定した—不安定な 正確な—不正確な まとまった—ばらばらな 規則的—不規則的 同じ—異なり
F 7	難易性 (難行感—易行感) 複雑な—単純な 細かい—粗い むずかしい—たやすい
F 8	距離性 (近接感—遠隔感) 短い—長い 近い—遠い
F 9	重量性 (軽量感—重量感) 軽い—重い 少ない—多い 若い—老いた

(): antonym in each factor named

Table 3 Naming of factors, selected scales and meanings of signs for Experiment 2

Factor	Factor named and selected scales
F 1	明快性 (明快感—暗然感) うれしい—悲しい 明るい—暗い にぎやか—さびしい 楽しい—苦しい 愉快な—不快な かわいい—にくい あつい—つめたい はりつめた—ゆるい きびしい—やさしい
F 2	審美性 (美的感—醜悪感) 上品な—下品な 清らかな—不潔な 美しい—みにくい 安定した—不安定な 自然な—不自然な
F 3	弾力性 (硬直感—柔軟感) かたい—やわらかい 直線的—曲線的 はりつめた—ゆるい 男性的—女性的 鋭い—鈍い 速い—遅い きびしい—やさしい
F 4	感情性 (良好感—嫌悪感) 面白い—つまらない すき—きらい 良い—悪い 個性的—平凡な
F 5	空間性 (広大感—狭小感) 大きい—小さい 広い—狭い 高い—低い 多い—少ない 派手な—地味な 激しい—静か
F 6	力動性 (活動感—沈静感) 若い—老いた 積極的—消極的 速い—遅い 新しい—古い 激しい—静か
F 7	重量性 (軽量感—重量感) 重い—軽い むずかしい—たやすい 深い—浅い まじめ—こっけい
F 8	調和性 (協和感—不協和感) 同じ—異なり まとまった—ばらばらな 規則的—不規則的
F 9	繊細性 (細密感—粗大感) 細かい—粗い 複雑な—単純な
F 10	距離性 (近接感—遠隔感) 近い—遠い 短い—長い あつい—つめたい 自然な—不自然な

() : antonym in each factor named

た、次のような共通の因子が選出された。即ち、
1) 明快性, 2) 審美性, 3) 力動性, 4) 弾力性, 5) 調和性, 6) 距離性の6因子である。

各意味次元の構成尺度は表4に見られるように、第1次元の「明快性因子」では「明快感」と「暗然感」のイメージの方向を持つ6尺度が抽出され、第2次元の「審美性因子」では、「美的感」と「醜悪感」の方向を持つ4尺度、第3次元の「力動性因子」では「活動感」と「沈静感」の方向を持つ2尺度、第4次元の「弾力性因子」では、「硬直感」と「柔軟感」の方向を持つ6尺度、第5次元の「調和性因子」では「協和感」と「不協和感」の方向を持つ3尺度、第6次元の「距離性因子」では、「近接感」と「遠隔感」の方向を持つ2尺度が抽出され、これらを用いて、舞踊作品が分析された (Table 4, 5, 6 参照)。

3. 共通意味次元による作品のイメージ

1) 作品間のイメージの差異

(1) 次元毎の作品間の全2者間の組み合わせ数に対する有意差率は、第4次元「弾力性因子」の95.56パーセントが最大であり、続いて第3次元の93.33パーセント、第1次元と2次元の88.89パーセント、第6次元の75.00パーセントであり、第5次元「調和性因子」の60.00パーセントが最小であった。即ち、「弾力性因子」における作品間のイメージには差異が多く見られ、「調和性因子」における差異は少なく見られたといえる (Table 7 参照)。

(2) 作品のイメージの方向について分析すると、第2次元「審美性因子」と第5次元「調和性因子」では、全ての作品は「美的感」と「協和感」の方向にイメージされた。第1次元「明快性因子」では作品3を除いて、第6次元「距離性因子」では作品6を除いて、「暗然感」と「遠隔感」の方向にイメージされ、第3次元「力動性因子」では作品

Table 4 Selected factor matrix for Experiment 1 and Experiment 2

尺度	+	-	E 1 明快	E 2 明快	E 1 審美	E 2 審美	E 1 力動	E 2 力動	F 1 弾力	F 2 弾力	E 1 調和	E 2 調和	E 1 距離	E 2 距離
1	広	い—狭					-.592							
2	やさし	い—きびしい		.407		-.308			.527	-.432				
3	つめた	い—あつ		-.431			.351		-.415					-.405
4	安定	した—不安定				-.477					-.672			
5	細	か—粗			.323									
6	激	し—静					-.592	.401	-.356	.308				
7	大	き—小					-.667							
8	こっ	けい—まじめ	-.465	.395										
9	派手	な—地味	-.452				-.454							
10	自然	な—不自然			-.542	-.420								.404
11	高	い—低				-.323	-.372							
12	上品	な—下品			.694	-.751								
13	若	い—老			.349		-.376	.661						
14	美	し—みにくい			.705	-.685								
15	むずかし	い—たやすい												
16	重	い—軽								.302				
17	正確	な—不正確			.303	-.343					-.610	-.324		
18	多	い—少					-.375							
19	愉快	な—不快	-.466	.557									.324	
20	浅	い—深												
21	まとまった	—ばらばら									-.607	-.584		
22	近	い—遠											.453	.734
23	積極	的—消極					-.423	.639						
24	清らかな	—不潔			.712	-.722								
25	短	い—長											.711	.422
26	強	い—弱					-.516	.373	-.424	.376				
27	す	き—き			.448		-.350							
28	異	なり—同									.507	.731		
29	うれ	しい—悲しい	-.735	.776										
30	はりつめた	—ゆる		-.419					-.632	.564				
31	男性	的—女性			.324		-.327		-.498	.541				
32	明	る—暗	-.768	.753										
33	にぎ	やか—さび	-.783	.719										
34	個性	的—平凡						.361						
35	良	い—悪			.407									
36	新	し—古	.385					.473						
37	速	い—遅	-.428				-.309	.501	-.329	.448				
38	単	純—複												
39	かわ	い—にく	-.464	.494	.418	-.309								
40	細	い—太			.436									
41	楽	しい—苦	-.719	.686										
42	面	白—つま	-.436		.344									
43	直	線—曲							-.610	.712				
44	規則	的—不規則							.349	-.594	-.559			
45	か	た—や							-.681	.777				
46	鋭	い—鈍							-.585	.533				

Note : The first down number stand for the number of scales

Note : The first side numer stand for the number of factors

_____ : selected scales

Table 5 Higher relationships between factor solutions of Experiment 1 and Experiment 2

	Ex. 1				※		※		※
	F1 明快	F2 審美	F3 力動	F4 弾力	E5 新奇	F6 調和	F7 難易	F8 距離	F9 重量
Ex. 2	F1 0.910 明快	F2 0.930 審美 F6 0.780 ※力動	F5 0.893 ※空間 F6 0.655 力動	F3 0.932 弾力	F4 0.844 ※感情 F6 0.655 ※力動	F8 0.811 調和 F2 0.524 ※審美	F9 0.620 ※距離 F7 0.402 ※重量	F10 0.583 距離	F7 0.614 ※重量

※ : factors excluded for selecting factors

Table 6 Common factors and the scales in Experiment 1 and Experiment 2

命名因子	選択尺度
F 1 明快性 (明快感—暗然感)	明るい—暗い うれしい—悲しい にぎやか—さびしい 楽しい—苦しい 愉快な—不快な かわいい—にくい
F 2 審美性 (美的感—醜悪感)	美しい—みにくい 上品な—下品な 清らかな—不潔な 自然な—不自然な
F 3 力動性 (活動感—沈静感)	激しい—静か 積極的—消極的
F 4 弾力性 (硬直感—柔軟感)	直線的—一曲線的 かたい—やわらかい きびしい—やさしい はりつめた—ゆるい 鋭い—鈍い 男性的—女性的
F 5 調和性 (協和感—不協和感)	まとまった—ばらばらな 規則的—不規則的 同じ—異なり
F 6 距離性 (近接感—遠隔感)	近い—遠い 短い—長い

() : 命名因子における対比的意味

1と5を除いて「活動感」の方向にイメージされ、第4次元「弾力性因子」では有意差が多いだけにイメージの方向にも多様性が見られた。また、作品間のイメージの方向の異なる最大の差異は、第1次元の作品2と3(作者:日本とフィンランド)、第3次元と第4次元の作品1と6(作者:日本と米国)、第6次元の作品6と7(作者:米国とキューバ)に見られた。即ち、作品2と3は「暗然感—明快感」、作品1と6は「沈静感—活動感」と「柔軟感—硬直感」、作品6と7は「近接感—遠隔感」と対比的にイメージされたといえる(Table 1, 7, 8, Fig. 1照)。

以上をまとめると、各次元における作品間の有意差は、60パーセント以上の割合で見られ、「弾力性因子」における作品間のイメージには差異が多く見られ、「調和性因子」における差異は少なく見られたといえる。また、本研究のコンクールにおける全作品が、審美的美的感、調和的協和感の方向にイメージされたことは、このコンクールの傾向であるといえる。また、各次元毎のイメージの最大の差異は、日本人の作者とフィンランド、米国の作者、米国の作者とキューバの作者の作品間

に見られた。これは作品は文化的な背景を基にして創作されることから、作者の舞踊のイメージやその内容が作品に影響を及ぼし、国際的にも作品のイメージの差異が見られたと考えられる。

2) 作品のイメージの特徴

(1) 作品1「屋根の下」は、審美的美的感、力動性沈静感、弾力性柔軟感の方向にイメージされた点に特徴が見られた。これは日常生活を表現しようとした作者の作品意図と関連があるように考えられる。

(2) 作品2「悲劇の相貌」のイメージは、明快性暗然感、弾力性硬直感の方向に見られた。これは作者のコメントにある「悲劇・孤独・生き抜く・戦う」²⁾などのイメージと関連があるように思われる。

(3) 作品3「SENSATIONS・感覚」は、明快性明快感、力動性活動感の方向にイメージされた点に特徴が見られた。この作品のみが明快感の方向にみられた。

(4) 作品4「北の春」は、審美的美的感、調和性協和感の方向にイメージされた。これは2対5の群舞の動きの中に美的感や、協和感がイメージ

Table 7 Results of t-test between two stimuli in each dimension

Dimension	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
D 1	2	***								
	3	***	***							
	4	**	***	***						
	5		***	***	*					
	6	***	***	***	***	***				
	7	***	***	***	***	***	*			
	8	***	***	***	***	***	**			
	9	***	***	***	***	***	***	***	***	
	10		***	***	***	***	***			***
	D 2	2	***							
3		***	***							
4			***	***						
5			***	***	**					
6		***		***	***	***				
7		***		***	***	***				
8		***	**	***	***	***	***	***		
9		***	***	***	***	***	***	***	**	
10		***	***	***	***	***	***	***	*	**
D 3		2	***							
	3	***	***							
	4	***	***	***						
	5	***	***	***	***					
	6	***	***	***	***	***				
	7	***	***	***	***	***	***			
	8	***	***	***	***	***	***	***		
	9	***	***	***	***	***	***	**	***	
	10	***	***	***	**	***	***		***	***
	D 4	2	***							
3		***	***							
4		***	***	***						
5		***	***	***	***					
6		***	***	***	***	***				
7		***	***	***	***	***	***			
8		***	***	***	***	***	***	***		
9		***	***	***	***	***	***	***		
10		***	***	**	**	***	***	***	***	*
D 5		2	***							
	3		***							
	4		***							
	5		***							
	6	**	***	***	***					
	7	***	***	***	***	**				
	8	***	***	***	***	***				
	9	***	***	***	***	***				
	10	**	***	***	***	***				
	D 6	2								
3		***	***							
4				**						
5		*	**							
6		**	***	***	***					
7		***	***	***	***	**	***			
8		*	***	***	***	***	***	**		
9		*	***	***	***	***	***	***		
10			***	***			***	***		

Note : Numbers stand for stimuli

* : $p < 0.05$

** : $p < 0.01$

*** : $p < 0.001$

Table 8 Semantic scores of 10 dance works in each factor

	W1	W2	W3	W4	W5	W6	W7	W8	W9	W10
F1	3.219	3.827	2.768	3.081	3.181	3.408	3.300	3.286	3.000	3.240
F2	2.098	2.862	2.698	2.158	2.006	2.843	2.849	2.356	2.657	2.491
F3	3.723	2.419	2.128	2.608	3.208	2.112	2.509	2.991	2.351	2.693
F4	3.856	2.333	2.710	2.885	3.441	2.280	2.678	3.326	3.207	3.076
F5	2.397	3.211	2.784	2.635	2.744	3.043	2.839	2.959	3.126	2.983
F6	3.248	3.292	2.972	3.196	3.064	2.784	3.586	3.280	3.216	3.220

Note : The first down number stand for the number of factors

Note : The first side number stand for the number of dance works

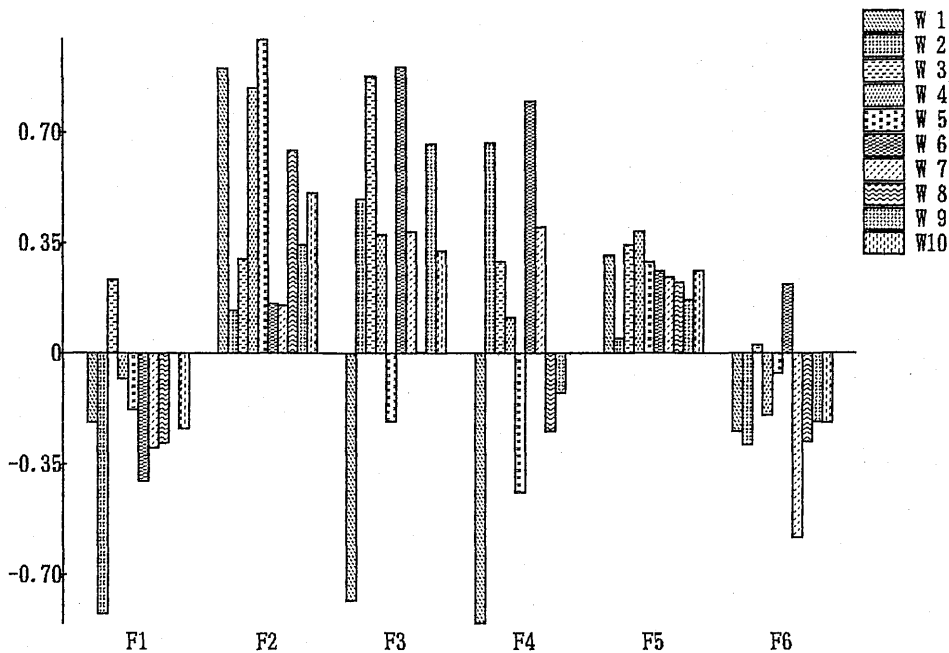


Fig. 1 Differences between dance works in each factor

されたと考えられる。

(5) 作品5「EMANCIPATE・解き放つ」は審美的美的感、弾力性柔軟感の方向にイメージされた点に特徴が見られた。これは「解き放つ」に至るまでの表現に美的感や柔軟感がイメージされたと考えられる。

(6) 作品6「“People Will Say We're in Love” (皆は僕達が愛しあっていると言う)」は、力動性活動感、弾力性硬直感、距離性近接感の方向にイメージされた点に特徴が見られた。これは「ラヴロマンス」³⁾を「疎外感、ユーモア、暴力で象徴」³⁾された内容が活動感と硬直感などに表われ、身体接触を多く用いて時間的に他の作品よりも短く表

現されたために近接感をイメージさせたと考えられる。

(7) 作品7「“GODOT” (ゴドー)」は、明快性暗然感、距離性遠隔感の方向にイメージされた点に特徴が見られた。踊り手は「眺められる」という特権を与えられた懐疑主義の輝きがみなぎる想像を絶する暗たんたるものを我々に感じさせる」³⁾ような暗然感と遠隔感を感じさせる内容と関連があるように考えられる。

(8) 作品8「“GUELL” (ギュエル)」は、力動性活動感、弾力性柔軟感の方向にイメージの特徴が見られた。これは「バレエを基調に、コンテンポラリーダンス、人類学舞台テクニク、アクロ

バット」³⁾などを用いた運動表現の中に、活動感や柔軟感が見られたと考えられる。

(9) 作品9「レクエム・エテルナム」は、審美的美的感の方向にイメージされた点にイメージの特徴が見られた。これは「三人の舞踊手(「命」「自然=大地」「心)」³⁾の表現に美的感が見られたと考えられる。

(10) 作品10「雪女」は審美的美的感や調和的協和感などの方向にイメージされた点に特徴が見られた。これは「雪女」と「人間」の関連の表現の中に美的感や協和感などが見られたと考えられる。

以上のことから、各作品の6意味次元におけるイメージは全て異なり、作者の意図との関連で各々独自の特徴が見られたと考えられる (Table 7, Table 8, Fig. 2 参照)。

4. 総括

1) 異なる刺激、被験者による2実験から得られた多因子解は、実験1では9因子、実験2では10因子抽出された。これらはいずれも筆者らの過去の研究に見られた因子である。

2) 抽出された共通の6意味次元とその対比的な方向性は次のように見られた。即ち、1) 明快性因子、明快感—暗黙感、2) 審美性因子、美的

感—醜悪感、3) 力動性因子、活動感—沈静感、4) 弾力性因子、硬直感—柔軟感、5) 調和性因子、協和感—不協和感、6) 距離性因子、近接感—遠隔感である。

3) 各次元の作品間の全2者間の組み合わせ数に対する有意差は、60パーセント以上の割合で見られ、「弾力性因子」における作品間のイメージには差異が多く見られ、「調和性因子」における差異は少なく見られた。

4) 本研究のコンクールにおける全作品が、「審美的美的感」、「調和的協和感」の方向にイメージされた。このことはこのコンクールの傾向であるといえる。また、各次元毎の作品間のイメージの最大の差異は国際的にも見られた。これは舞踊のイメージが舞踊作品の文化的な背景に影響されたためであると考えられる。

5) 各作品の6次元意味空間のイメージは全て異なり、作者の意図との関連で各々独自の特徴が見られたと言える。

結論と展望

本研究は、異なる2回の国際創作舞踊コンクールにおいて審査された入賞作品のイメージの特徴と傾向を、多変量統計解析の手法を用いて抽出さ

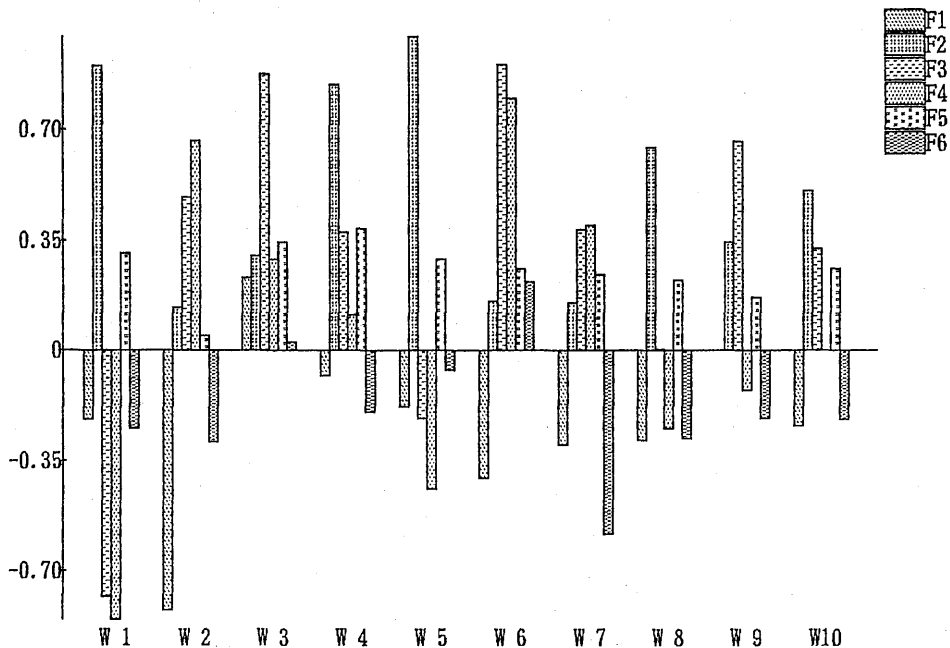


Fig. 2 Characteristics of dance works in a semantic space

れた、共通の意味空間において分析され推察されるために行われた。刺激材料は、「第4回埼玉国際創作舞踊コンクール」と「第4回埼玉国民文化祭89・埼玉国際創作舞踊祭89」決選大会で審査員によって評価された入賞作品の10作品が用いられた。VTRに収録された作品のイメージの測定のために、舞踊のイメージを測定するための意味差判別法が用いられた。大学生の作品としての刺激に反応した結果は、多変量統計解析の手法を用いて分析された。共通意味空間は、異なった2回の実験から得られた異なった2種類の多因子解を基にして決定された。その結果、次の様な結論が推察された。

1. 作品間のイメージには、共通のイメージとしての「審美的審美感」と「調和性協和感」が見られ、その他の次元では差異が見られた。

2. 各作品の6次元意味空間のイメージは全て異なり、各舞踊作品が各々独自の特徴を持ったと考えられる。

3. 本研究の「国際創作舞踊コンクール」における入賞作品の傾向は、「審美性」次元と「調和性」次元に共通のイメージが見られ、作品間の差異は、国際的にも見ることができた。

今後このような方法で、舞踊作品や運動表現などのイメージの特徴が分析され、作品の構造的性との関連でイメージが探究されるならば、更に舞踊のイメージの構造が明確になり、舞踊作品の創作や、指導に役立てることができると考えられる。

本研究のためにご協力いただきました、富山女子短期大学、筑波大学学生の皆様に大変感謝し、ここに御礼を述べさせていただきます。

参 考 文 献

- 1) Harman, HH (1976) : Modern Factor Analysis. 3th ed., Chicago : The University of Chicago.
- 2) 「第4回国際創作舞踊コンクール」プログラム.
- 3) 「第4回国民文化祭さいたま89・埼玉国際舞踊祭89」プログラム.
- 4) 頭川昭子, 松浦義行, 川口千代(1980) : 意味空間における舞踊のイメージ. 体育学研究 24 : 281-

- 290.
- 5) 頭川昭子, 松浦義行(1981) : 意味空間における舞踊のイメージ—舞踊における音の効果—. 筑波大学体育科学系紀要 4 : 41-48.
- 6) 頭川昭子, 松浦義行(1982) : 意味空間における舞踊のイメージ—ダンス・パフォーマンスにおける集団の大きさ—. 筑波大学体育科学系紀要 5 : 37-46.
- 7) Zukawa, A (1985) : The images of dance affected by movements rhythm patterns in semantic space. Bull. Inst. Health & Sport Sciences, University of Tsukuba 8 : 137-148.
- 8) 頭川昭子, 松浦義行, 若松美黄(1985) : 意味空間において simple locomotive dance movements に影響をうける舞踊のイメージ. 大学体育研究 7 : 103-116.
- 9) 頭川昭子, 松浦義行(1986) : 意味空間における運動パターンに関する舞踊のイメージ. 筑波大学体育科学系紀要 9 : 103-114.
- 10) 頭川昭子, 松浦義行(1986) : 意味空間における舞踊のイメージ—音のリズムパターンの効果—. 筑波大学運動学研究 2 : 19-28.
- 11) Zukawa, A and Matsuura Y (1987) : The images of dance relating to rhythm patterns of sound and movements in semantic space. 1986 Asian Games Scientific Congress Proceedings, pp. 1188-1203.
- 12) 頭川昭子, 松浦義行(1987) : 意味空間における舞踊の身体空間的向性に関するイメージ(その1). 筑波大学体育科学系紀要 10 : 107-147.
- 13) 頭川昭子, 松浦義行(1988) : 意味空間における舞踊の身体空間的向性に関するイメージ(その2). 筑波大学体育科学系紀要 11 : 87-101.
- 14) 頭川昭子, 松浦義行(1989) : 意味空間における舞踊作品の部分と全体に関するイメージ. 筑波大学体育科学系紀要 12 : 123-133.
- 15) Zukawa, A and Mastuura, Y (1990) : The images of dance affected by tempos of movements. Chongchung Nam : 1988 Seoul Olympic Scientific Congress Proceedings, pp. 890-897.
- 16) 頭川昭子, 林 裕子, 松浦義行, 若松美黄, 和田伊通子(1990) : 国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品の一傾向. 筑波大学体育科学系紀要 13 : 91-99.